

# 日本中東学会ニューズレター

**JAMES**  
**NEWSLETTER**



No. 144

2016/7/28

## 目次

理事会・総会報告 .....	2
第32回年次大会報告 .....	10
『日本中東学会年報 (AJAMES)』編集委員会報告 .....	34
第11回 AFMA モンゴル大会のご案内 .....	36
公開講演会のご案内 .....	36
日本における中東・イスラーム研究文献データベースのアップデート (更新) について .....	38
寄付金の受贈 .....	39
寄贈図書 .....	39
会員の異動 .....	40
事務局より .....	41
編集後記 .....	42

## 理事会・総会報告

### 【2016年度第1回理事会】

日時：2016年5月14日（土）午前10時から午後12時15分

場所：慶應義塾大学三田キャンパス西校舎1階514教室

出席：赤堀雅幸、飯塚正人、江川ひかり、大稔哲也、粕谷元、栗田禎子、  
黒木英充、近藤信彰、東長靖、林佳世子、保坂修司、松本弘、森本一夫、  
森山央朗、山岸智子、山口昭彦

欠席：なし

### 〔議題〕

1. 2015年度事業報告・2015年度決算報告を承認した（詳細は総会議事録を参照）。
2. 2016年度事業計画・2016年度予算案を承認した（詳細は総会議事録を参照）。
3. 総会資料を確認した。
4. 2016年11月20日に岐阜県多治見市の多治見市文化会館において公開講演会を開催することを確認した。この公開講演会の経費として、2016年度科研費（研究成果公開発表）を執行することを承認した。
5. 2015年度科研費（国際情報発信強化）の執行実績を確認した。
6. 2016年度科研費（国際情報発信強化）の執行計画を承認した。
7. AJAMES 編集活動が報告され、2016年度の編集体制・編集方針を承認した。英語版の投稿規定・原稿執筆要領の改訂・整備の必要が提起され、今後の理事会で協議・検討することとした。また、執筆者に贈呈する抜刷を、現行の印刷物からPDFファイルに変更することを検討することが提起された。
8. 2015年度に受け取った寄付金の使途について報告があり、承認した。
9. 東洋文庫が人間文化研究機構（NIHU）プロジェクトの一環として行ってきた「日本における中東・イスラーム研究文献データベース」の更新作業の学会への委託につき、NIHUプロジェクトが2015年度末で終了したため、2016年度以降は東洋文庫の自己事業となり、学会への委託も終了したことが説明された。本データベースの有用性に鑑み、これまで学会予算から支出していた費用については2016年度も支出すること、それより後については可能な支援を検討することを承認した。
10. 年次大会における託児所について、運営方法の継承・改善と一定の質を確保するための方策を学会事務局で検討することを承認した。

11. 2016年9月23～24日に、モンゴル中東学会を幹事組織としてウランバートルで開催される AFMA（アジア中東学会連合）大会につき、会員の参加支援の方策を検討した。
12. 30周年記念座談会の記録の公開方法について検討した。
13. 会員の異動が報告された。
14. 学会ウェブサイトと会員メーリングリストの問題点について議論した。
15. 第17期役員選挙を2016年11月頃実施することを確認した。
16. 2018年の WOCMES（中東研究世界大会）はセビリャ（スペイン）で開催されることが報告された。
17. 総会の司会者、議長、書記、議事録書名人の候補が報告された。

### 【日本中東学会第32回年次総会報告】

日時：2016年5月14日（土）午後17時15分から18時15分

会場：慶應義塾大学三田キャンパス西校舎517教室

出席：当日出席者70名、委任状提出128名、計198名

（会員総数688名に対する総会定足数5分の1（138名）を満たしたことにより、総会成立）

#### 1. 司会および総会役員を選出

清水学会員の司会により、議長として新井和広会員、書記として小笠原弘幸、佐々木紳両会員、議事録書名人として岩本佳子、須永恵美子両会員を選出した。

#### 2. 2015年度事業報告および決算

第16期各担当理事より、総会資料に基づく報告があった。

##### 2-1. 2015年度事業報告（森山央朗 事務局長）

a) 第31回年次大会を、2015年5月16～17日に、同志社大学今出川校地において開催した。

- ・公開シンポジウム『中東の「長い19世紀」：流動化する地域秩序、政治化する「宗派」』
- ・アラブ音楽ミニコンサート
- ・研究発表9部会48本、企画セッション2本。
- ・韓国中東学会から KIM Suwan 理事を招待した。

b) 日本中東学会年報（AJAMES）第31-1号、第31-2号の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行った。

- ・海外研究機関他、国内外寄贈先への発送を行った。
- ・国立情報学研究所論文情報ナビゲータ (CiNii) 上で公開されるよう手配した。
- c) 2015 年 11 月 4 日に第 21 回公開講演会『イスラームの多様な貌 (かお) : 共生のための理解をめざして』を、地域研究コンソーシアム学会連携プログラムとして、九州大学文学部イスラーム文明史学研究室他の共催、西日本新聞社の後援を得て、九州大学箱崎キャンパスにおいて開催した。
- d) 海外の関連学会との交流を促進した。
  - ・第 31 回年次大会に、韓国中東学会から KIM Suwan 理事を招待した。
  - ・2015 年 10 月 23～25 日に、韓国外語大学校 (ソウル) を主会場として開催された、第 25 回韓国中東学会国際会議、Asian and Middle Eastern Countries since the End of World War II: Seeking for a New Partnership between the Two Regions に、理事 3 名 (東長靖会長、森山央朗事務局長、保坂修司理事) が参加し、それぞれ報告を行った。
  - ・2015 年 11 月 23 日に、北米中東学会 MESA 第 49 回年次大会 (デンヴァー) において、中東研究世界大会 WOCMES が組織した Thematic Conversation、“State of the Art in Middle East Studies”に三浦徹会員を派遣し、三浦会員は報告と意見交換を行った。
- e) ニューズレター和文 4 回 (総頁 77 頁) を発行した。第 139 号 (2015/4/21、9 頁)、第 140 号 (7/30、年次大会特集、37 頁)、第 141 号 (11/10、15 頁)、第 142 号 (2016/2/15、16 頁)。
- f) 「日本における中東研究文献データベース 1989-2015」につき、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ウェブサイトにおいて公開した。
- g) 学会ウェブサイトおよび会員メーリングリストによる広報を行った。
- h) 地域研究学会連絡協議会の参加組織として、地域研究の興隆を図るとともに、参加組織の相互交流に努めた。
- i) 東洋文庫との連携事業として「日本における中東研究文献データベース」作成にかかる、研究動向調査、データ編集と作成を行った。
- j) 2015-2016 年度会員名簿を刊行した。
- k) 会員の増減：2015 年度中には入会者 29 名、退会者 23 名 (うち、会費滞納による退会 11 名、自主退会 12 名) の異動があった。その結果、2016 年 3 月 31 日現在の会員数は 688 名 (正会員 538 名 / うち海外在住 14 名 ; 学生会員 150 名 / うち海外在住 5 名) となった。

## 2-2. AJAMES 第 31-1 号、第 31-2 号編集報告 (粕谷元 AJAMES 編集委員長)

- ・日本中東学年報 (AJAMES) 第 31-1 号 (2015 年 7 月)、第 31-2 号 (2016 年 3 月) が刊行された。

- ・第 31-1 号では、論文 9 本の投稿があり、うち 4 本を掲載した。
- ・第 31-2 号では、論文 25 本の投稿があり、うち 14 本を掲載した。
- ・海外研究機関ほか、国内外寄贈先への発送をおこなった。
- ・国立情報学研究所論文情報ナビゲータ (CiNii) 上で公開されるよう手配した。

#### 2-3. 2015 年度決算報告 (森山央朗 事務局長)

- ・年会費の納入率が低下した。原因は、事務局の移転、それにとまなう引き継ぎ等の事情で年会費の督促を徹底できなかったことにあると考えられる。また、これにとまなう、事務局費の通信費が予算より大幅に少ない執行額となった。
- ・事業費の AJAMES 印刷製本費は、第 31-2 号の AFMA 特集のために欧文レイアウト費が高額となり、また、同号の頁数が大幅に増加したことなどにより予算を約 38 万円超過した。
- ・事業費の AJAMES 国内発送費および海外発送費のうち、2015 年度中の執行を予定していた第 31-2 号の発送費については、金額の確定が年度末を越えたため、2016 年度会計で執行することとなった。
- ・2015 年度に受け取った寄付金 (総額 550,000 円) について、そのうち 400,000 円を年次大会託児所特別基金の増資にあてた。残りの 150,000 円は、本会計に繰入れて 2016 年度に繰越した。

#### 3. 監査報告 (帯谷知可 監事)

- ・2016 年 5 月 9 日に学会事務局 (同志社大学) にて、2015 年度会計の会計監査を行った結果、適正に執行されたことを確認した。

〈質疑応答〉なし

〈採決〉以上の 2015 年度事業報告および決算報告について、総会はこれを承認した。

#### 4. 2016 年度事業計画および予算

第 16 期各担当理事より、総会資料に基づく報告があった。

##### 4-1. 事業計画 (森山央朗 事務局長)

- 第 32 回年次大会を 2016 年 5 月 14~15 日に、慶應義塾大学三田キャンパスにおいて開催する。

- b) 日本中東学会年報 (AJAMES) 第 32-1 号 (2016 年 7 月)、第 32-2 号 (2017 年 1 月) の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行う。刊行にあたり、科研費 (国際情報発信強化) の助成を受ける。
- c) 第 22 回公開講演会「イスラーム世界の新しいライフスタイル：観光」を、2016 年 11 月 20 日に多治見市文化会館 (岐阜県多治見市) で開催する。開催にあたり、科研費 (研究成果公開発表) の助成を受ける
- d) ニュースレターを年数回発行する。年次大会報告号は紙媒体で発行する。
- e) (公財) 東洋文庫との連携事業として「日本における中東・イスラーム研究文献データベース」につき、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ウェブサイトにおいて公開する。
- f) 学会ウェブサイトおよび会員メーリングリストによる広報を行う。
- g) 海外の関連学会との交流を促進する。
  - ・第 32 回年次大会に、韓国中東学会から KIM Jong-Do 会長と KIM Suwan 事務局長を招待する。
  - ・2016 年 9 月 23～24 日にウランバートルで開催予定の第 11 回 AFMA (アジア中東学会連合) 大会に参加し、国際交流を強化する。
- h) 地域研究学会連絡協議会参加組織として相互交流に努め、地域研究の興隆を図る。
- i) 日本学術会議協力学術研究団体として、他団体と連絡を取り必要な活動を行う。
- j) 第 17 期選挙を行う。

#### 4-2. AJAMES 第 32-1 号、第 32-2 号編集計画、2016 年度編集体制

(粕谷元 AJAMES 編集委員長)

- ・第 32-1 号の編集を進めており、投稿 11 本 (うち英文 2 本) のうち 5 本 (うち英文 1 本) を掲載予定である。
- ・編集委員の交代：縄田浩志、藤元優子両会員が退任し、錦田愛子、斎藤剛、福田義昭各会員が新たに着任した。
- ・抜き刷りについて：第 33-1 号 (2017 年度) 以降、紙媒体は有償提供、PDF は無償提供とする方向で現在検討中である。本件について、意見がある場合は事務局に連絡してほしい。

#### 4-3. 2016 年度予算案 (森山央朗 事務局長)

- ・事業費のうち国際交流費について、AFMA 関連の予算として前年度より増額した。2015 年度の寄付金のうち本会計で繰越した 150,000 円をこれにあてる。

- ・中東・イスラーム文献 DB 更新費について、今年度から東洋文庫からの分担金（800,000 円）が廃止されたため、学会予算支出分（100,000 円）のみとなった。

〈質疑応答〉なし

〈採決〉以上の 2016 年度事業計画案および予算案について、総会はこれを承認した。

5. 会長挨拶（東長靖会長）
6. 議事終了につき、議長の新井和広氏が降壇し、司会の清水学会員により閉会が宣言された。

（森山央朗 事務局長）

## 2015年度決算

## 本会計

収入	15年度予算	15年度決算
<b>2014年度よりの繰越金</b>	<b>14,457,133</b>	<b>14,457,133</b>
<b>年会費</b>	<b>5,509,850</b>	<b>2,130,000</b>
正・学生会員	5,409,650	2,130,000
2012年度以前分	88,800	30,000
2013年度分	178,200	55,000
2014年度分	487,050	210,000
2015年度分	1,879,750	875,000
2016年度分	2,775,850	900,000
2017年度分	0	60,000
賛助会員	100,000	0
<b>その他</b>	<b>3,530,500</b>	<b>4,445,966</b>
科研費公開講演会助成金	0	0
科研費国際情報発信強化助成	2,300,000	2,300,000
利子	500	756
AJAMES販売代金	230,000	392,484
海外郵送料実費	0	0
AJAMES広告費	0	0
東洋文庫連携事業分担金	800,000	800,000
NII-ELS著作権料	200,000	202,726
JCAS補助金(公開講演会向け)		200,000
寄付		550,000
<b>収入合計</b>	<b>23,497,283</b>	<b>21,033,099</b>

(単位:円)

2016年度への繰越金内訳	13,183,315
郵便振替口座	11,294,368
三井住友銀行口座	1,802,167
Paypal口座	24,954
現金	61,826

(単位:円)

## 年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2014年度よりの繰越金	60,823	
本会計より繰り入れ	400,000	
利子	10	
第31回大会託児所運営費		26,286
振込手数料		108
2016年度への繰越金		434,439
<b>合計</b>	<b>460,833</b>	<b>460,833</b>

(単位:円)

支出	15年度予算	15年度決算
<b>事務局費</b>	<b>1,845,000</b>	<b>1,715,087</b>
アルバイト謝金	1,100,000	948,800
通信費	60,000	7,645
消耗品費	80,000	97,606
会議費	15,000	23,328
交通費	150,000	200,710
振込手数料	20,000	19,872
事務局備品費	250,000	249,406
事務局移転費	70,000	64,050
資料保管費	100,000	103,680
<b>事業費</b>	<b>7,158,000</b>	<b>6,134,687</b>
大会開催費	400,000	400,000
大会会場費	0	0
AJAMES編集費	150,000	186,848
同政文校閲費	750,000	261,790
同印刷製本費	2,100,000	2,480,814
編集委員会旅費	150,000	118,560
AJAMES宣伝費	10,000	0
国際発信強化旅費(海外招聘)	150,000	137,186
国際発信強化旅費(海外派遣)	1,000,000	253,914
国際交流費	50,000	0
ニューズレター等発行費	300,000	209,870
NL発送費	60,000	54,035
AJAMES国内発送費	300,000	90,050
AJAMES海外発送費	130,000	19,620
インターネット広報費	35,000	36,072
公開講演会開催費	450,000	457,928
中東・イスラーム文献DB更新費	900,000	900,000
地域研究会協議会分担金	0	5,000
年次大会特別基金繰り入れ	123,000	123,000
託児所特別基金繰り入れ	50,000	400,000
諸雑費	50,000	0
<b>支出合計</b>	<b>9,003,000</b>	<b>7,849,784</b>
<b>2016年度への繰越金</b>	<b>14,494,283</b>	<b>13,183,315</b>
<b>総計</b>	<b>23,497,283</b>	<b>21,033,099</b>

(単位:円)

## 年次大会特別基金

費目	収入	支出
2014年度よりの繰越金	514,605	
利子	84	
本会計より繰り入れ	123,000	
第31回大会開催費への補填		47,059
振込手数料		108
2016年度への繰越金		590,522
<b>合計</b>	<b>637,689</b>	<b>637,689</b>

(単位:円)

## 学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2014年度よりの繰越金(片倉もとこ研究奨励基金を含む)	2,304,821	
利子	528	
奨励金		200,000
2016年度への繰越金		2,105,349
<b>合計</b>	<b>2,305,349</b>	<b>2,305,349</b>

(単位:円)

2016年度予算  
本会計

収入	15年度予算	16年度予算
<b>2014年度よりの繰越金</b>	<b>14,457,133</b>	—
<b>2015年度よりの繰越金</b>	—	<b>13,183,299</b>
<b>年会費</b>	<b>5,509,850</b>	<b>3,895,300</b>
正・学生会員	5,409,650	3,795,300
2013年度以前分	267,000	101,850
2014年度分	487,050	134,100
2015年度分	1,879,750	459,000
2016年度分	2,775,850	1,858,350
2017年度分	—	1,242,000
賛助会員	100,000	100,000
<b>その他</b>	<b>3,530,500</b>	<b>3,460,236</b>
科研費公開講演会助成金	0	500,000
科研費国際情報発信強化助成	2,300,000	2,500,000
利子	500	500
AJAMES販売代金	230,000	250,000
海外郵送料実費	0	0
AJAMES広告費	0	0
東洋文庫連携事業分担金	800,000	0
NII-ELS著作権料	200,000	209,736
<b>収入合計</b>	<b>23,497,283</b>	<b>20,538,835</b>

(単位:円)

(参考)各年度正・学生会員会費未納額および納付率

年度	未納額	前年度(2015年度)納付率
2012年度分		16%
2013年度分	485,000	13%
2014年度分	745,000	22%
2015年度分	1,700,000	34%
2016年度分	4,765,000	15%
2017年度分	6,210,000	
<b>合計</b>	<b>13,905,000</b>	

上の表の見方は以下の通り

未納額:本年度予算策定時点で在籍している会員の会費未納額  
前年度納付率:予算策定年度の前年度(たとえば2016年度予算であれば2015年度)決算における会費納付額÷前年度予算に書かれている未納額

\*2016年度予算に書かれている各年度(2013~2017年度)の年会費収入予算は、各年度分の会費未納額(上記)に、その前年度分会費の2015年度における納付率(=2015年度決算における会費納付額÷2015年度予算に書かれている未納額)に5%を足した値を掛けることによって算出している

例)2016年度分会費収入予算(2016年度分会費予想収入)  
=2016年度分会費未納額×(2015年度分会費納付率+5%)  
=4,765,000×(34%+5%)=1,858,350

年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2015年度よりの繰越金	460,833	
本会計より繰り入れ	50,000	
利子	10	
第32回大会託児所運営費		120,000
2017年度への繰越金		390,843
<b>合計</b>	<b>510,843</b>	<b>510,843</b>

(単位:円)

支出	15年度予算	16年度予算
<b>事務局費</b>	<b>1,845,000</b>	<b>1,590,000</b>
アルバイト謝金	1,100,000	1,100,000
通信費	60,000	60,000
消耗品費	80,000	80,000
会議費	15,000	30,000
交通費	150,000	150,000
振込手数料	20,000	20,000
事務局備品費	250,000	50,000
事務局移転費	70,000	0
資料保管費	100,000	100,000
<b>事業費</b>	<b>7,158,000</b>	<b>6,230,000</b>
大会開催費	400,000	400,000
大会会場費	0	100,000
AJAMES編集費	150,000	200,000
同僚文校製費	750,000	650,000
同印刷製本費	2,100,000	2,100,000
編集委員会旅費	150,000	150,000
AJAMES宣伝費	10,000	20,000
国際発信強化旅費(海外招聘)	150,000	150,000
国際発信強化旅費(海外派遣)	1,000,000	830,000
国際交流費	50,000	150,000
ニューズレター等発行費	300,000	100,000
NL発送費	60,000	60,000
AJAMES国内発送費	300,000	300,000
AJAMES海外発送費	130,000	130,000
選挙費用	0	150,000
インターネット広報費	35,000	35,000
公開講演会開催費	450,000	500,000
中東・イスラーム文献DB更新費	900,000	100,000
地域研究学会協議会分担金	0	5,000
年次大会特別基金への繰り入れ	123,000	0
託児所特別基金繰り入れ	50,000	50,000
諸雑費	50,000	50,000
<b>支出合計</b>	<b>9,003,000</b>	<b>7,820,000</b>
<b>2016年度への繰越金</b>	<b>14,494,283</b>	
<b>2017年度会費分留保</b>		<b>1,242,000</b>
<b>2017年度への繰越金</b>		<b>11,476,835</b>
<b>総計</b>	<b>23,497,283</b>	<b>20,538,835</b>

(単位:円)

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2015年度よりの繰越金	637,689	
利子	100	
本会計よりの繰り入れ	0	
2017年度への繰越金		637,789
<b>合計</b>	<b>637,789</b>	<b>637,789</b>

(単位:円)

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2015年度よりの繰越金(片倉もとこ研究奨励基金を含む)	2,105,349	
奨励金		0
利子	300	
2017年度への繰越金		2,105,649
<b>合計</b>	<b>2,105,649</b>	<b>2,105,649</b>

(単位:円)

## 第 32 回年次大会報告

### 【プログラム】

2016 年 5 月 14 日（土）公開企画

シンポジウム『インド洋海域史研究の現在』

慶應義塾大学三田キャンパス西校舎 517 番教室

司会：新井和広（慶應義塾大学）

開会挨拶・趣旨説明

基調講演：家島彦一（東京外国語大学）「インド洋海域史研究の道歩んで」

報告：上田信（立教大学）、栗山保之（東洋大学）、鈴木英明（長崎大学）、

弘末雅士（立教大学）\*50 音順

休憩

パネルディスカッション・質疑応答

閉会挨拶

日本中東学会総会

懇親会（於 南校舎 4F ザ・カフェテリア）

2016 年 5 月 15 日（日）企画セッション・個人研究発表

慶應義塾大学三田キャンパス南校舎

企画セッション 1

### **Reimagining the Politics of the Gulf Monarchies in the 21st Century**

Matthew GRAY（The Australian National University）

“Situating the Debate: The Case for a Reimagination of the Gulf’s Politics”

TSUJIGAMI Namie（The University of Tokyo）

“A Strategy of Surviving Patriarchy: Women’s Family Network”

Sean FOLEY（Middle Tennessee State University）

“To Think outside the Box: How Saudi Women Use a Conservative Culture to Transform the Kingdom's Online World”

Chair: HOSAKA Shuji（The Institute of Energy Economics, Japan）

企画セッション 2

### **現代ムスリム社会における宗教権威：ウラマーとイスラーム主義者を事例として**

高尾賢一郎（日本学術振興会）

「サウジアラビアに見る職業としての「ウラマー」：ワッハーブ主義におけるその役割」

後藤絵美（東京大学）

「現代ムスリム社会における知識と権威：エジプトの「サラフ主義者」を事例として」

コメンテーター：松永泰行（東京外国語大学）

司会：長沢栄治（東京大学）

### 企画セッション3

#### 非母語話者に対するアラビア語教育と評価：アラブ地域と日本における事例から

近藤久美子（大阪大学）

「非母語話者のアラビア語習得：母語の相違の観点から」

榮谷温子（慶應義塾大学）

「アラブおよびイスラーム系施設のアラビア語講座の特色」

宮川光國（独立研究者）

「アラビア語検定を通して見る日本におけるアラビア語学習評価」

### 個人研究発表

#### 第1部会

井堂有子（東京大学・院）

「エジプトの食料補助金制度改革と食料安全保障：小麦流通問題に着目して」

西舘康平（東京外国語大学・院）

「GERD原則宣言をめぐるナイル川流域の水政治」

齋藤秋生子（上智大学・院）

「カッザーフィー政権リビアにおける部族政策とその変容」

山本沙希（お茶の水女子大学・院）

「女性零細事業主・在宅労働者の商実践と世帯：現代アルジェリアの首都アルジェを事例として」

今井真士（文教大学）

「権威主義体制下の二元二首執政制とエジプト第三共和政の政党政治：大統領職の憲法的権限の変遷と2015年代議院選挙前後の党派的権力の展開」

河村有介（ダラム大学・院）

「権威主義体制下における組織労働と政権：エジプトとメキシコの比較分析」

黒田彩加（京都大学・院）

「屹立するイスラーム中道派の主張：世俗派と過激派のあいだで」

## 第2部会

今井宏平（アジア経済研究所）

「トルコの国境管理政策：シリア国境とギリシャ国境での活動を中心に」  
李若菲（慶應義塾大学・院）

「交易ディアスポラと社会価値送金（Social Remittances）の社会影響：レバノンの例から」

成地草太（明治大学・院）

「クリミア戦争（1853～56年）後、オスマン帝国の難民定住政策における「義捐金・物資（iane）」：難民委員会による徴収と配分の構造」

山本健介（京都大学・院）

「エルサレムにおける聖地問題の史的展開と現代の変容：イスラエル領内のイスラーム運動の活動を中心に」

小林和香子（独立研究者）

「イスラエル人女性による平和構築活動の現状」

堀尾藍（国際交流基金）

「パレスチナにおける初等教育の現状と課題：UNRWAによる支援に対する一考察」

## 第3部会

Scott MORRISON（Middlesex University）

“Quantifying the Legal Content of *Qur'an* and *Hadith*”

KIM Suwan（KAMES）

“Emerging Arab Inbound Tourism Market to Korea and its Challenges”

JIANG Xudong（Keio University）

“China's Role, Progress and Limitation in the Reconstruction of Iraq”

Khalil DAHBI（Tokyo University of Foreign Studies, J）

“The Evolution of Political Oppositions in Tunisia and Morocco: A Field-level Comparative Historical Analysis”

Qolamreza NASSR（Hiroshima University, J）

“Shi'a Islam and Democracy: Linkage and New Development before and after Iranian Revolution of 1979”

SUZUKI Takahiro（Doshisha University, J）

“Homeland'-segregation Assemblage: Nation-state in Form, Colonialism in Content”

ABE Satoshi (Nagasaki University)

“An Examination of Roles of Islam in Iranian Environmental Politics”

#### 第4部会

宮下遼 (大阪大学)

「16世紀オスマン詩におけるトルコ語語彙の地位：簡明トルコ語派詩人を中心に」

岡崎弘樹 (パリ第3大学・院)

「現代シリアにおける監獄経験の表象」

天野優 (同志社大学・院)

「サミー・ミハエルの作品にみるファルフード：20世紀イラクにおけるユダヤ人のアイデンティティに焦点を当てて」

穂山祐子 (一橋大学・院)

「トルコ共和国における新字の導入：普及をめぐる施策と実態」

竹田敏之 (京都大学)

「湾岸アラブ諸国におけるプリントメディアの発展とアラビア語意識の変容」

勝畑冬実 (東京外国語大学)

「エジプト映画における『イスラーム主義』の表象：「テロリスト (1994)」以前の作品分析から」

#### 第5部会

近藤重人 (日本エネルギー経済研究所)

「サウディアラビアと中東和平提案」

渡邊駿 (京都大学・院)

「アラブ・湾岸君主制：ハイブリッド性を解析するための視座をめぐって」

白谷望 (上智大学)

「モロッコにおける伝統行事の政治的「制度化」：バイアの儀礼と国王の「フトバ」の分析から」

池端蒨子 (京都大学・院)

「スンナ派国家としてのヨルダンとその宗派・宗教和合戦略」

岡野内正 (法政大学)

「中東研究の質的変容に向けて：板垣雄三氏の問題提起をめぐって」

須永恵美子 (京都大学)

「マウドゥーディーの経済観：雑誌『クルアーンの解釈者』に寄せた論稿を中心に」

荒井悠太（早稲田大学・院）

「歴史叙述におけるアサビーヤ：イブン・ハルドゥーン著『実例』の分析」

## 第6部会

近藤信彰（東京外国語大学）

「19世紀後半テヘランの宗教的少数派：シャリーア法廷記録より」

後藤裕加子（関西学院大学）

「サファヴィー朝初期の首都タブリーズの王宮地区」

青木健太（お茶の水女子大学）

「イスラーム国ホラーサーン州出現の背景：属州設置の思惑とターリバーンとの関係を中心に」

梶山卓哉（龍谷大学・院）

「英国外交文書から見たイスラーム革命直後のイラン」

上原健太郎（京都大学・院）

「マレーシアにおけるイスラーム型担保融資の実態と比較優位：クランタン州における顧客調査から」

川村藍（京都大学）

「イスラーム金融の民事紛争処理制度としてのドバイ・アプローチとマレーシア・モデル」

安田慎（帝京大学）

「宗教観光におけるアントレプレナーシップをめぐる一試論：インド・ムンバイのイスラーム旅行会社Sを事例に」

## 第7部会

鷺見朗子（京都ノートルダム女子大学）

「『百一夜物語』の写本」

苗村卓哉（慶應義塾大学）

「ヒジュラ暦9-11世紀東アラブ世界におけるアルド：名士伝記集の数量的分析から」

野口舞子（お茶の水女子大学・院）

「12世紀前半マグリブ・アンダルスにおける法学者のネットワーク：カーディー・イヤードを中心に」

ハシャン・アンマール（京都大学・院）

「イスラームにおけるハムル（醱酎飲料）の禁止：古典資料を用いた立法過程再構成の試み」

奥美穂子（明治大学）

「王の祝祭」から近代国家祝典へ：オスマン帝国における王権祝祭の契機と変容」

近藤文哉（上智大学・院）

「19世紀」エジプトのマウリドに対するイギリス人の観察と記述：ダウサを分析の中心として」

竹村和朗（東京外国語大学）

「苗農場で働く：現代エジプトの沙漠開拓地における農業実践の一事例として」

## 第8部会

矢久保典良（千葉商科大学）

「日中戦争後期、中国ムスリム団体の憲政論議と「戦後構想」：1943年以降の言説を事例に」

役重善洋（大阪市立大学）

「日中戦争下における日本軍の宗教工作とシオニズム運動」

サット・ヌールッラー（アンカラ大学・院）

「トルコ学術界における井筒俊彦の位置づけ：評価と批判」

## 【公開シンポジウム報告】

本大会初日の公開シンポジウムは「インド洋海域史研究の現在」と題し、長年にわたって海域アジア世界の歴史を研究してきた家島彦一氏の講演を中心に、関連分野の研究者4名に報告していただき、最後にパネルディスカッションと質疑応答を行った。

家島氏の講演「インド洋海域史研究の道を歩んで」は、自身の研究人生を振り返りながら行われた。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所に入所した後、イドリースーの著作の写本を探すために渡欧した際に見つけたラスール朝年代記がその後の氏の研究の方向を決めたこと、現地学と歴史学を結びつけるフィールド調査の際に遭遇したダウ船がインド洋海域世界を意識するきっかけになったことなど、文献研究と臨地研究を組み合わせた研究スタイルを確立した経緯が説明された。その後、世界におけるインド海域史研究の歩みの中に自分の研究を位置づけ、陸域だけではなく海域から歴史を見ることの重要性が強調された。

家島氏の講演を受けて行われた報告は、各報告者の専門地域をもとに、西から順に行われた。鈴木英明氏（長崎大学）はスワヒリ研究、栗山保之氏（東洋大学）はイエメン・アラビア半島を中心とする海域史、弘末雅志氏は海域東南

アジア、上田信氏はアジアからアフリカにかけて広範囲に見られるタカラガイの利用という観点から、家島氏の講演と関連させ、研究成果が報告された。どの報告も、従来の地域や分野を超えたスケールの大きな研究の成果を基にした、充実したものだった。

フロアからは、ピレンヌ・テーゼの考え方をインド洋海域に適用する可能性、地中海とインド洋における商人の差異とイスラームの関係、金産地においてタカラガイが珍重された理由など、多くの興味深い質問がなされ、講演者・報告者によって活発な議論が展開された。(新井和広)

### 【研究発表会場から】

#### 企画セッション 1

#### **Reimagining the Politics of the Gulf Monarchies in the 21st Century**

##### (現代湾岸諸国の政治の再考察)

湾岸諸国に関しては従来、国家や統治の役割に重点が置かれ「ハイポリティクス」に関する研究は蓄積されてきた。だが、湾岸諸国を的確に理解するには、これらの研究のみでは不十分であるとも指摘されている。本企画セッションでは、「ハイポリティクス」の重要性を排除することなく、非国家アクターおよび勢力の役割や願望を再評価することによって湾岸諸国の政治を再考察することを目的としている。

最初の報告者 Matthew GRAY からは、レントィア国家論、新家産制、専制主義など、湾岸諸国の国家と社会の関係についての先行研究が紹介された。これらの理論は現在でもその重要性を失っていないが、グローバル化や社会の変容によって生じた湾岸地域の複雑さや大きな変化を十分に説明できない限界も示された。だからこそ湾岸諸国の政治の「再想像」の必要であることが示された。第二の報告では、辻上奈美江から、サウジアラビアにおいて維持・強化されている女性の拡大家族ネットワークについて発表された。報告では、女性たちの集まりで構築されたネットワークが、離婚や複婚など女性に不利益に働くことの多い出来事に対して、集団的なエイジェンシーを発揮する効果があると指摘された。Sean FOLEY による報告では、なぜサウジ女性がサイバー空間で存在感を有しているのかが議論された。フォーレイは、プライバシーと親族関係が重視されるサウジ社会において、女性たちはプライバシーを守るサイバー空間を活用して、現実世界とサイバー空間の両方でネットワークを構築していることを指摘した。

報告後は、本セッションの司会である保坂修司によって質疑応答が進められた。フロアからは、サウジの女性や若者のネットワークや教育・就労との関係について活発な質問とコメントが寄せられた。(辻上奈美江)

## 企画セッション2

### 現代ムスリム社会における宗教権威：ウラマーとイスラーム主義者を事例として

イスラームの宗教的権威をめぐるかつての古典的な問いかけは、ウラマーやスーフィーが近代化や国民国家・資本主義・植民地支配などといった現象にどのように向き合い、また自ら変容したかというものであった。しかし、今日的な関心が向けられるべきは、宗教的権威を担うどのような新しい主体や制度が現れ、現代の社会政治変容の中でどのような役割を果たしているかという点であろう。本企画セッションでは、高尾報告が「職業としてのウラマー」が制度化されたサウジアラビアにおける最高ムフティー職の変容とメディアに見るその機能の実態を考察し、後藤報告がエジプト革命で注目を集めたサラフ主義者の「権威」の源泉についてヒジャブをめぐる議論を事例に分析した。

いずれも豊富な事例紹介を中心とする内容であったが、松永コメンテーターからは、事実確認なのか、先行研究批判を含む学問的問いかけなのか、問題設定が不十分であるという批判がなされた。また、内容的には、宗教知識人の養成・教育・相互評価などの制度的な分析、また権威と何かをめぐる議論がさらに深められるべきとの意見がイランとの比較の視点から出された。会場からは、権威と名声の関係、サウジはワッハーブ主義体制ではなく建前上は多宗派法学派統合体制である、人気説教師とサラフ主義者との比較、在野ウラマーとアズハルなどの旧権威との関係などの質問やコメントが出され、活発な議論が行われた。同テーマの研究発展の出発点となる機会となったと思う。（長沢栄治）

## 企画セッション3

### 非母語話者に対するアラビア語教育と評価：アラブ地域と日本における事例から

本セッションは、アラビア語教育について、アラブ地域の事例を近藤久美子が、日本における事例を榮谷温子氏が、そして教育の評価について宮川光國氏がそれぞれ発表をして、非母語話者、とくに日本人学習者のアラビア語教育についての研究を発表したものであった。

近藤はカタール大学人文科学部の Arabic for Non Native Speakers Centre での授業を見学したときの様子を語り、ネイティブ教員のもとで様々な国籍の受講生たちが多くの会話の練習をしていたことを述べたが、その際に鳥飼玖美子氏の『本物の英語力』という書の、言語とアイデンティティの分析を比較した。

榮谷氏は、在京のアラブ・イスラーム学院で用いられているテキスト、所謂『東京シリーズ』の構成と用いられている例文を分析し、イスラーム的な話題にも言及しつつ、テキストの例文が非常にステレオタイプなジェンダーと家族像が多く用いられていることを指摘した。

宮川氏は、これまで9回実施されてきた日本アラビア語検定協会の検定受検者と合格者のデータを提示し、受検者の学習方法やその合否結果などについて詳細な分析をおこない、今後日本におけるアラビア語運用能力をはかるためのアラビア語検定の役割と、効果的な学習方法について提言をおこなった。

フロアからは、現代におけるアラビア語教育の方法やアラビア語検定のレベル設定についての質問やコメントが多く出され、活発な議論がかわされた。

(近藤久美子)

## 第1部会

### 井堂有子「エジプトの食料補助金制度改革と食料安全保障：小麦流通問題に着目して」

本発表は現政権下で改革が進められてきた食料補助金制度、とくにパンの補助金制度を取り上げ、2015年6月の小麦混合事件とその背後にある小麦をめぐる食料安全保障の国内議論を整理するなかで食料補助金制度の構造的問題を考察した。質疑応答では、小麦混合事件の含意やアプローチなどに関して質問、コメントがあったが、朝一番の発表にもかかわらず、それなりの人数の参加者が集まり、本研究テーマに対する高い関心が伺われた。

### 西館康平「GERD原則宣言をめぐるナイル川流域の水政治」

2015年にエチオピアで大エチオピア・ルネサンス・ダム（GERD）に関する原則宣言がエジプト、スーダン、エチオピアの間で調印された。本発表はこのGERD原則宣言の調印にいたるまでの交渉過程を取り上げ、交渉当事国が使用したナイル川に関するターミノロジーと各国の交渉を後押しした外部要因の分析結果をもとに、ナイル川をめぐる水政治の実像の一端を明らかにした。質疑応答では、ナイル川流域の定義や外部要因としての治安問題の扱いなどについて議論されたほか、研究の方向性についての質問がだされた。今後の研究の展開に期待したい。

### 齋藤秋生子「カッツァーフィー政権リビアにおける部族政策とその変容」

本発表は、カッツァーフィー政権期リビアの部族政策の変容について、閣僚や革命委員会のメンバーなどの分析を踏まえて考察したもので、政権による部族を単位とした取り込みと排除が継続して行われてきたことが論じられた。質疑応答では、リビア研究者や外交官の参加者などからご自身の研究との重複や閣僚の出身地分類、リビアでの現状についてのコメントが寄せられた。資料的制約があり「部族」という難しいテーマを扱うだけに、先行研究を十分に吟味したうえで、今後の研究継続と発表が望まれる。

## 山本沙希「女性零細事業主・在宅労働者の商実践と世帯・現代アルジェリアの首都アルジェを事例として」

本発表は、首都アルジェ在住の女性零細事業主および在宅労働者を対象に発表者が実施した参与観察と聞き取り調査結果を報告し、性役割規範・分業があるなかでの女性の商実践の一端として、不安定な事業のリスク回避における身近な社会関係の活用の実態を明らかにした。質疑応答では、調査事例の女性を取り巻く社会関係、家族関係のもつ否定的な側面などについて多くのコメントが寄せられた。レジュメが配布されなかったのは残念であるが、調査成果を踏まえた今後の研究の発展が期待された。(岩崎えり奈)

第1部会午後のセッションでは、現代エジプト政治に関係する三つの研究発表がなされた。今井真士会員の報告は、権威主義体制下における執政府・立法府関係の比較政治学的知見を敷衍し、半大統領制の概念的な抽象性を高めた二元二首執政制(parallely legitimized dual executive)の一例としてエジプトの事例を位置付け、その実践の変化を憲法的権限と党派的権力の両面から探った。2014年以降の第三共和政では、それ以前と違って国家元首としての権限が低下し、代議院における支持勢力が確固とした単一与党から緩やかな院内会派へと変化したことで、大統領は政権運営を主導するより調停役に徹する可能性が高まったと指摘した。これに対し大統領の調停者としての役割やクウェートの皇太子との比較などに関して質問がなされた。

河村有介会員は、エジプト・ムバーラク政権とメキシコ・制度的革命党政権の比較から権威主義体制下における組織労働と政権の関係を考察した。同会員は、エジプト政治で度々言及されている「社会契約」を国民に対する再分配を強調するインフォーマルな制度と定義し、このようなインフォーマルな制度が存続しているエジプトでは、存続していないメキシコに比べて、政権側が組織労働に対して譲歩を重ね、国営企業の民営化をはじめとする公共部門改革が遅れたと指摘した。これに対し、両対象国における新自由主義政策、構造調整政策の功罪、populism と rent の相関や労組の自律性に関する比較などについて質問が出された。

黒田彩加会員の発表は、現代エジプトで特定の組織的基盤を持たずに活動するターリク・ビシュリーはじめ中道派イスラーム思想家の社会的役割と思想的特色を、一次資料の分析を通じて考察した。その結果、これらの中道派思想家群が、あえて運動組織を設立せず、特定の権威に縛られない思想潮流として自身を評価している点、また近年は世俗主義とイスラーム主義の対立関係の脱構築を試み、複数の潮流の主張を掬いあげた第三項となりうる潮流の創出を目指している点を指摘した。これに対し「イスラーム中道派」の社会的影響力や世

俗主義とイスラーム主義間の合意形成力をどの程度に評価したらよいかをめぐって質問が交わされた。 (富田広士)

## 第2部会

第2部会午前中のセッションでは、中東地域における人間の移動に関する報告が3本並んだ。

### 今井宏平（日本貿易振興機構アジア経済研究所）「トルコをめぐるボーダーポリティクス：シリア内戦に起因する人の移動とセキュリティの政治力学」

本発表は、トルコがシリア内戦の直接的影響を受けた人の移動の主要な移動ルートとして機能していることに注目し、ボーダースタディーズにおける「透過性」と「トランジット国家」の概念を軸に据えて、内戦の過程を通じてそれらがどのように変容したのかを明らかにするものであった。ボーダースタディーズは静的な国際関係分析を乗り越えるために発展してきたが、その理論的な背景が整理され、トルコのシリア国境とギリシア国境における難民・戦闘員の具体的な動きと政府の対応が検討され、一度高められた透過性は低減させるのが困難であること、滞留性の高いトランジット国家から流動性の高いトランジット国家へのトルコの変容ぶりが指摘された。質疑では、流動性の高い中東諸国の中のトルコの意味、時間的射程の設定の意味、主権の空白地帯と難民移民ビジネス、移民による財移転の方法としてのビットコイン利用の可能性などが議論された。

### 李若菲（慶應義塾大学大学院社会学研究科修士課程）「交易ディアスポラと社会価値送金(Social Remittances)の社会影響：レバノンの例から」

本発表は、世界的規模で活躍が目立っているレバノン・ディアスポラを対象にして、その本国に対する貢献を「経済的送金」と「社会価値送金」の観点から検討し、先行研究から特に後者に関わるものとしてレバノンの教育・医療システムの発展におけるディアスポラの関与の仕方を説明しようとするものであった。まだ研究を始めて間もない段階の報告であったが、日本在住のレバノン・ディアスポラを対象にしてインタビュー調査を進めたいとの希望が表明された。質疑では「社会価値送金」という訳語の妥当性やディアスポラ/移民の概念の整理、ディアスポラにとっての「故国」の枠組みの多様性、Social Remittancesの送り手と受け手の間における価値評価のギャップの可能性などについて、助言と議論がなされた。

## 成地草太（明治大学大学院文学研究科博士課程）「クリミア戦争（1853-56）後、オスマン帝国の難民定住政策における義捐金・物資（i'âne）：難民委員会による徴収と配分の構造」

本発表は、クリミア戦争後の約 10 年間に黒海北岸の地域からオスマン帝国領内に移動したムスリム難民に対するオスマン政府の受入・定住・臣民化政策について、多数のオスマン語史料（「官報」「時事通信」や文書類）を駆使してその全体構造を解明するものであった。中央政府直属の全帝国統括組織として「難民委員会」が設置されたが、それが実質的に管理しえた義捐金・物資はイスタンブルのもののみで、バルカンやアナトリアでは各地方政府が独自に任務を遂行していたこと（エジプト・バグダード両州は難民委員会に送金）、しかしながら「難民委員会」は新聞などを使って難民支援キャンペーンを全帝国規模で展開していたことが指摘された。質疑では、イスタンブル・バルカン・アナトリアでの対難民義捐金配分額の違いや、非ムスリム臣民からの義捐金供出、難民からの「感謝」の有無、後に非オスマン領化したバルカン地域の定住難民の行方、難民の人口規模と定住先選定の実態などについて議論された。

司会者としてこれらの発表と質疑に接して、中東と他地域を結びつける人の移動をめぐって豊かな問題群に触れることができ、今後この分野における研究が大いに進展する可能性が感じられたことを、大きな喜びをもって付言したい。

（黒木英充）

## 山本健介「エルサレムにおける聖地問題の史的展開と現代的変容：イスラエル領内のイスラーム運動の活動を中心に」

山本氏の報告は、聖地エルサレムをめぐるイスラエルとパレスチナの対立を、特にエルサレム在住およびイスラエル国籍をもつパレスチナ人ムスリムの視点から捉えようとした研究であった。聖地をめぐるステイタス・クオ（現状／原状維持）が具体的に何を指し、それがどう脅かされてきたか、それに対するイスラエル領内のイスラーム運動の関わりなどが詳細に解説された。また実際の運動とイスラーム上の概念との関連性が説明された。

## 小林和香子「イスラエル人女性による平和構築活動の現状」

小林氏の報告は、イスラエル人女性による平和構築活動の歴史と、それぞれの時期を代表する平和活動組織および活動内容を紹介し、それらの活動に対する評価を行うものだった。運動ではジェンダー差別のほか、イスラエル政府によるパレスチナの占領、女性政治囚、エルサレム問題、和平交渉への女性の参加など、様々なテーマが取り上げられ、それら相互の関係性が提示されてきた。質疑では、運動の評価指標の中身を明確化すべきなどの指摘があった。

## 堀尾藍「パレスチナにおける初等教育の現状と課題：UNRWA による支援に対する一考察」

堀尾氏の発表では、パレスチナ自治区における現在の初等教育システムの概要について述べられ、その問題点について、ガザ地区など教育現場の教員に対するいくつかの質問への回答が報告された。質疑では、最近の教育内容に変化はあるのか、また西岸地区での教育にヘブライ語教育は取り入れられているのか、などについて質問された。(錦田愛子)

### 第3部会

午前のセッションは、現代のアラブ地域に関わる様々な諸研究を緩やかに包摂するものであった。(以下紹介では邦題は省略。)

第一の発表はスコット・モリソン氏 (Dr. Scott MORISSON, ミドルセックス大学) の“Quantifying the Legal Content of the Qur’an and Hadith”。その目的はクルアーン (今回ハディースは省く) の数量的分析によって、現代の中東・北アフリカ諸国家の憲法やイスラーム主義者たちが法源としてのシャリーアを主張することを、近代国民国家の法概念も参照しつつ再考しようとするもの。クルアーンでは法的性質を持つ節を 330 節とし、宗教実践の節と法の諸分野 (民法、刑法、家族法、訴訟法など) の節に分類する。さらにこれら諸節の分析から、クルアーン中、法的内容を含む部分を訴訟や実際に適用するには別に独立した思想が必要であるとする。

次はキム・スワン氏 (Prof. KIM Suwan, 韓國中東学会/韓国外国語大学校) の“Emerging Arab Inbound Tourism Market to Korea and its Challenges”。本発表は、新マーケットとしてのアラブ諸国から韓国へのインバウンド訪問者の訪問前後の経験や意識を解明することで、異文化経験を検討し、「韓流」観光マーケティングのさらなる効率化に資することを目的とする。結果として訪問者の最良の体験としては親切なホスト側の態度、食事、ショッピングが挙げられたのに対し、悪い体験としては通訳、タクシーサービスなどが挙げられた。

次の二発表は若手によるもので、まずは蔣旭棟氏 (Mr. JIANG Xudong, 慶應義塾大学/上海外国語大学・院) の“China’s Role, Progress and Limitation in the Reconstruction of Iraq”である。発表者は 2003 年 9 月以降の中国のイラク復興関与における「控え目」(being low profile) から「積極的な参与者」(active participant) への変化を指摘し、例えば石油のイラクからの輸入の急激な増加、また油田開発への中国企業の参加に経済復興への積極性が見られるとした。最後に現在中国はイラクの政治状況の不安定化もあり、wait and see のアプローチをとっているが、エネルギーの需要は引き続き増大し、政治的関与も積極的となる可能性がある」と指摘した。

最後はハリール・ダフビー氏 (Mr. Khalil Dahbi, 東京外国語大学・院) の “The Evolution of Political Opposition in Tunisia and Morocco: A Field-level Comparative Historical Analysis” であり、チュニジアとモロッコの 1950 年代から 60 年代初頭にかけてのポスト独立期における野党の活動を、ピエール・ブルデューの「場」(field, champ) の理論 (本発表では field theory) を援用して分析したものである。発表者はさらにブルデューの概念を用い、最後に権力の場における参加者の活動実践を彼らの資本とハビトゥスが形成するとし、権力の場での闘争は、それが包摂する様々な場が反映すると指摘した。

以上の諸発表をめぐり活発な議論と意見交換 (例えば「法」の定義やハビトゥスの概念の分析有効性の問題の議論など) がなされ、これらの研究の今後の展開を期待させた。最後に本セッションは多様で意欲的な研究発表を熱心な聴衆が支えた意義深いものであったと述べて報告を終えたい。(野元晋)

ゴラーム・レザー・ナスル氏は、「シーア派と民主主義」と題し、イラン革命前からの歴史的体験及び思想を継承しつつ発展してきた、「イスラーム民主主義」の概念について報告した。「民主主義」と「イスラーム」の融合を図ろうとする知識人の思考回路に潜むバイアスが、民主主義理解に限界を与え、真の民主化を妨げているとの結論に、多くの質問が寄せられ、活発な議論が展開された。情報テクノロジーの発展による知の伝達方法の変化や、制限がありつつも「選挙参加」という行為の繰り返しによる、身体に刻まれた「民主主義」的行動実践の影響といった要因について、さらなる考察の必要性が指摘された。

鈴木隆洋氏は、南アフリカとパレスチナにおける「人種隔離」政策を比較し、両者は「植民地主義的支配」と「人種差別」において共通点はあるものの、「民族的祖国」の位置づけと法的隔離の方法に相違点があると説明した。報告者は、極端な法的隔離システムを構築した、オスロ合意以降のヨルダン川西岸・ガザ地区の状況を示すために、「アパルトヘイト」ではなく「アッサンブラージュ」という概念の提示を試みた。しかし、短時間に二つのケースを同じボリュームで紹介するのは無理があった。パレスチナの事例に新しい概念を導入する理由の説明に焦点をあてるなど、発表の仕方や資料に工夫をする必要が感じられた。

阿部哲氏は、近年、イランで深刻化している環境問題について、ハーメネイー最高指導者を始めとするイスラーム宗教指導者のディスコースに照射して報告を行った。イラン国民への環境教育普及のために、イスラーム宗教指導者の協力を得ながら実践しようとする政府の試みが紹介された。成長と環境のバランス、環境省の調整機能に関する質問に対し、政権によって力点が異なるものの、ロウハーニー政権成立後、環境政策が活発化しているとの見解が示された。昨今、環境運動家が逮捕される事件も起きており、環境問題解決のための「保

守」と「改革・現実派」の協力は薄氷を踏むようなバランスの中で進展しているという印象を受け、今後も注目に値する重要な研究テーマである。

(貫井万里)

#### 第4部会

午前の部では、文学を中心に3つの報告が行われた。まず、宮下遼氏（大阪大学）による『16世紀オスマン詩におけるトルコ語語彙の地位：簡明トルコ語派詩人を中心に』は、共和国初期の文学研究者フアト・キョプリュリユが「発見」とされる「簡明トルコ語派」と呼ばれるトルコ語語彙を多く使用したオスマン朝期の詩人たちの作品を、主に脚韻部における修辭的効果に着目するという新たなアプローチによって分析しようとする試みであった。民族主義的だとしてしばしば批判されてきたという「簡明トルコ語派」という枠組みを再考しようという近年の研究動向を踏まえての報告であったが、そうした再考によってどのような新たな発見がトルコ文学史に書き加えられる可能性があるのか、発表者の見通しがより明確に示されると、さらに議論が深まったと思う。

次に、岡崎弘樹氏（パリ第3大学・院）による『現代シリアにおける監獄経験の表象』は、大量の政治犯を生んできた強権的な政権下で、「自分の国にも世界にも見捨てられている」と絶望しつつもなお、自らの監獄経験をフィクションあるいはノンフィクションの形で執筆してきたシリア人作家たちの営為を概観する内容であった。特に「収監者問題が公式言説化」し、テレビドラマや映画、ノンフィクションや政治評論でも取り上げられるようになったという2000年代以降の代表的な著作として、ヤースィーン・ハーッジ・サーレフが16年間に及んだ自らの刑務所体験を振り返ったエッセイに焦点が当てられ、将来、シリアの政治文化が再構築される際にこうした知的営為が果たすであろう役割が示唆された。

最後に、天野優氏（同志社大学・院）による『サミー・ミハエルの作品にみるファルフード：20世紀イラクにおけるユダヤ人のアイデンティティに焦点を当てて』は、イスラエルのイラク系ユダヤ人作家サミー・ミハエルが、1941年にバグダードで起こったファルフードと呼ばれるユダヤ人迫害事件を描いた小説を取り上げ、その主人公の人物像の分析を通じて「当時のイラクに存在しえたユダヤ人の複合的アイデンティティ」に迫ろうとする試みであった。会場からの多くの質問を受けて、作品の史実性とフィクション性、一般的なシオニズム言説との比較、「イラク人」「アラブ人」「ユダヤ人」の間で揺らぐアイデンティティといった点をめぐり、活発な議論が行われた。（山本薫）

穂山祐子氏による研究発表「トルコ共和国における新字の導入：普及をめぐる施策と実態」では、トルコ共和国で新字導入に際して、教員、役人、宗務関係者がどのようにして新字を習得することとされたか、その際にどのような問

題や摩擦があったのか、を公文書にもとづいて明らかにしようとしたものである。役人に新字を習得させるプログラムは各省庁に丸投げされたこと、事実上二つの書記規範が並存するなかで宗務関係者の管理に強い関心が払われたこと、などが報告された。

武田敏之氏による研究発表「湾岸アラブ諸国におけるプリントメディアの発展とアラビア語意識の変容」では、湾岸地域／諸国における近年のアラビア語をめぐる営為が政治＝経済的推移との連関から説明された。系譜や血統によるアラブ意識と地域主義、「国民」アイデンティティの確立が難しいなかでの各国の「口語」や「方言」への注目、飛躍的な購買力の上昇が活性化させている文化誌・古典復刻版の出版やクルアーン印刷、言語や辞典編纂のための機関が新たに設立されている現状などが例示された。

勝畑冬実氏による研究発表「エジプト映画における「イスラーム主義」の表象～「テロリスト」(1994)以前の作品分析から」では、イスラーム主義急進派の人物を主人公として正面から取り上げたナーディル・ガラール監督の「テロリスト」(1994年公開)に先行する映画1549本のあらすじを確認した成果が報告された。1980年代後半から「信心深さ」を装っている人物やテロ組織が登場すること、「イスラーム主義者」の末路は死か逮捕となっていること、そしてイスラーム主義者の葛藤や苦悩に寄り添う姿勢も皆無ではないこと、が指摘された。

この部会の参加者は30名ほどで、それぞれの報告について密な議論が行われた。  
(山岸智子)

## 第5部会

### 近藤重人「サウディアラビアと中東和平提案」

本報告は、サウジアラビアが過去に発表した2つの中東和平提案とその背景について検討したものである。2つの提案とは、1981年にファハド皇太子によって発表されたファハド和平提案と、2002年にアブドゥラー皇太子によって発表されたアブドゥラー和平イニシアティブである。結論では、ファハド和平提案は自らの立ち位置を明らかにし、また対米関係と対アラブ関係を良好なものにしようとしたものであり、アブドゥラー和平イニシアティブは安全保障強化の観点からのアメリカでのサウジアラビアのイメージの改善が目的であったとされる。

### 渡邊駿「アラブ・湾岸君主制：ハイブリッド性を解析するための視座をめぐって」

本報告は、現代のアラブ・湾岸君主制の特質を「ハイブリッド性」に求め、その分析枠組みの可能性を論じたものである。発表者は、現代のアラブ・湾岸君主制が現代国家としての側面と王朝としての2つの側面を有することに注目

し、それをハイブリッド性にとらえてヨルダンとバハレーンの例を検討した。ヨルダンでは国王の議会審議への介入が事例として取り上げられ、バハレーンに関しては 2011 年以降の政治改革における国民対話や議会と王家との関係が検討された。2つの国の事例を通し政治における君主の役割を検討した。

#### **白谷望「モロッコにおける伝統行事の政治的『制度化』：バイアの儀礼と国王の『フトバ』の分析から」**

本報告は、モロッコの国王即位記念日の式典で行われるバイアの儀礼と国王のフトバ（演説）の分析を通し、独立後のモロッコで伝統行事が政治的に制度化されていく過程を明らかにしようとしたものである。先行研究が示され、その後、国王即位記念日の行事の流れ、バイアの儀式と開催地、フトバの内容が検討された。過去数十年間の事例について検討され、開催地やフトバの内容には王制がその時々を抱えていた政治的・社会的関心事が反映されており、時代に応じて場所や内容も変化していることが報告された。

#### **池端 蒨子「スンナ派国家としてのヨルダンとその宗派・宗教和合戦略」**

本報告は、ヨルダンの宗派・宗教和合戦略の内容を検討し、その戦略的意義について検証したものである。2004 年にヨルダン国王の名で発表された宗派和合を目的としたアンマン・メッセージを検討し、続いて、2007 年にキリスト教などとの宗教間の和合を目的とし王子ガーズィーによって公表された「共通の言葉」イニシアティブについて検討が加えられた。穏健スンナ派国家であるヨルダンの国家戦略としての宗派・宗教戦略により、宗派・宗教和合の新潮流が形成され、宗教間対話でもイニシアティブを発揮しているとした。

(福田安志)

#### **岡野内正「中東研究の質的変容に向けて：板垣雄三氏の問題提起をめぐって」**

これまで中東研究を牽引してきた板垣雄三氏の問題提起を踏まえて、岡野内氏が近年関心を持っているグローバル・ベイシック・インカム論の中東研究への適用を模索した。板垣氏の問題提起における基本概念である「近代」「都市」「市場」を取りあげ、それらに基づいて展開される人類史的な提言を高く評価するが、これらの基本概念の社会経済史的背景についてのさらなる検討の必要性を主張し、自らの提言を行った。今後、その提言を実現するための具体的な手法の説明が望まれる。

#### **須永恵美子「マウドゥーディーの経済観：雑誌『クルアーンの解釈者』に寄せた論考を中心に」**

マウドゥーディーの著作のうち、雑誌『クルアーンの解釈者』に投稿された「経済」に関する 900 にもものぼる論考の書誌学的な整理を試みた。マウドゥーディーの思想については、これまでジハード論を中心とした思想的、政治的論考の分析に研究の中心が置かれてきたが、彼の「経済」思想についても注意を

向けるべきことを主張した。基礎的で貴重な作業であるが、今後は、書誌学的紹介を超えたマウドゥーディーの経済思想に関する内容検討が望まれる。

### 荒井悠太「歴史叙述におけるアサビーヤ：イブン・ハルドゥーン『実例』の分析」

イブン・ハルドゥーンの文明論の中核を「アサビーヤ論」とし、その研究の深化をイブン・ハルドゥーンの主著『実例』にみられるアサビーヤという言葉のテキスト・クリティークによってなすべきことを主張した。その手法は、『実例』での理論的言説とイブン・ハルドゥーンの自伝研究に基づく彼の経歴とを突合せるというものである。『実例』から多くのアサビーヤへの言及事例が拾い出されているが、今後の議論の精緻化には、アサビーヤという言葉の使われ方のより厳密な分類が望まれる。(加藤博)

## 第6部会

### 近藤信彰（東京外国語大学）

#### 「19世紀後半テヘランの宗教的少数派：シャリーア法廷記録より」

近藤報告は、カージャール朝下テヘランに関わる19世紀後半の法廷記録を活用することで、ムスリムと非ムスリムとの関係を具体的な事例から浮かび上がらせるものであった。イランの非ムスリム社会に関する研究は、オスマン史などに比べて立ち後れており、その点、貴重な報告であったし、また比較史の材料を提供するものでもあった。質疑でも、他の時代・地域における非ムスリムの地位やオスマン朝の非ムスリムによる法廷利用との比較を念頭に活発な議論が行われた。

### 後藤裕加子（関西学院大学）

#### 「サファヴィー朝初期の首都タブリーズの王宮地区」

後藤報告は、Sussan Babaieがイラン都市の特徴として提起した「広場—宮殿」モデルを参照枠として、サファヴィー朝初期の首都タブリーズの王宮地区サーヒブアーバードの歴史的起源や発展をたどり、当該地区の発展がサファヴィー朝以前に始まり、また後の「広場—宮殿」構造の先駆けとなったことを明らかにしようとするものであった。有名なマトラクチュのタブリーズ図について通説と異なる解釈を示すものでもあったため、質疑においてもこの点が一つの焦点となった。

### 青木健太（お茶の水女子大学）

#### 「イスラーム国（ISIL）ホラーサーン州の活動状況：ISILはその属州において勢力を拡大するか」

青木報告は、2015年初頭にイスラーム国によって設置された「イスラーム国ホラーサーン州」に焦点を当てて、ターリバーン運動やインドのアル=カーイ

ダとの関係なども踏まえながら、登場の経緯や思惑をたどったものである。質疑では、「属州」を設けることがどのような意味をもつのか、ハディースに見られる「黒旗の人々とホラーサーン」というイメージと関わりがあるのか、さらには、当地の人々にとってのISの「魅力」を知るにはどこに視点を向けるべきなのかなど、多くの質問が寄せられた。

#### **梶山卓哉（龍谷大学・院）**

##### **「英国外交文書から見たイスラーム革命後のイラン」**

梶山報告は、在テヘラン英大使館の電報を分析することで、イギリスがイラン革命の動向をどう捉えていたのかを問うものであり、イギリスが、イランの民主国家への変貌を期待しつつ、イスラーム体制の確立を予測できなかったことなどが指摘された。質疑では、イギリスは早くにパフラヴィー朝から距離を置いていたのか、革命に対して何らかの工作活動を図ったのか、また大使館側の電報だけではなく本省からの指示にも注目すべきではないかといった質問が投げかけられた。

(山口昭彦)

#### **上原健太郎（京都大学）「マレーシアにおけるイスラーム型担保融資の実態と比較優位：クランタン州における顧客調査から」**

本発表は、マレーシアでのイスラーム型担保融資（ラフヌ）の利用実態とその比較優位について、顧客調査から得られたデータに基づき、明らかにしようとするものである。調査結果より、手続きの容易さといった理由から、ラフヌが個人ローンなどの他の金融商品よりも選好されるとの結論が示された。同融資の返済率やその利用をめぐるイスラーム的な意義等について活発な質疑応答がなされた。非常に興味深い調査結果が示されていることから、今後の研究の進展に期待をしたい。

#### **川村藍（京都大学）「イスラーム金融の民事紛争処理制度としてのドバイ・アプローチとマレーシア・モデル」**

本発表は、イスラーム金融に関わる民事紛争に着目し、イスラーム金融市場をけん引するアラブ首長連邦のドバイとマレーシアでのイスラーム金融に関する紛争処理制度について、その実態や特徴を明らかにしようとするものである。ドバイでは、2009年末のドバイ・ショックを契機にアドホックでありながら、イスラーム金融に関わる紛争を迅速に処理する制度が整えられた。一方、マレーシアでは、行政が主導して、既存の司法制度を活用しつつ、シャリア諮問委員会が紛争処理に関与する制度を整えられた。質疑応答では、主にイスラーム法に係る裁判外紛争処理制度（ADR）が取り上げられた。

## 安田慎（帝京大学）「宗教観光におけるアントレプレナーシップをめぐ る一試論：インド・ムンバイのイスラーム旅行会社 S を事例に」

本発表は、ムンバイにあるイスラーム旅行会社 S の経営者へのインタビューから、宗教観光におけるアントレプレナーの役割について明らかにしようとするものである。インタビュー調査から、アントレプレナーとしてのイスラーム旅行会社が、イスラーム的価値が埋め込まれた新たな社会的実践としての余暇活動を創出する役割を果たしていることに加えて、事業性と社会性の両立を図るソーシャル・アントレプレナーとしての役割をも果たしているとの見解が示された。宗教と余暇との関係について検討を試みる意欲的な報告であり、今後の展開を見守りたい。（上山一）

### 第7部会

#### 鷺見朗子（京都ノートルダム女子大学）「『百一夜物語』の写本」

本報告はライデン大学所蔵の『百一夜物語』写本に焦点をあて、欠落部分、収録話の順番・内容などのいくつかの観点から、フランス国立図書館、アガ・ハーン美術館など他の機関所蔵の写本との比較・検討を行った。会場からは本研究の予想される結論、また、歴史的観点からの本研究の意義を問う質問が出たほか、報告者自身からも、写本中に見られる魔方陣について、同様のものが他の史料中に見られるかどうか、会場に対して問いかけがあるなど、活発な議論が行われた。

#### 苗村卓哉（慶應義塾大学）「ヒジュラ暦 9-11 世紀東アラブ世界におけるアルド：名士伝記集の数量的分析と事例研究を通して」

本報告は中世東アラブ世界において広く行われたアルド（学生が著名な学者に対して行う暗唱発表）に着目し、名士伝記集を中心史料に、その時代・地域、アルドを行った者の諸属性、アルドと学問習得の過程、アルドの出席者、の4つの観点から数量的分析と事例研究を行なった。その結果、アルドが主に14世紀前半～17世紀前半の東アラブ世界において行われたこと、男女・法学派を問わず多くの人々によって行われ、その実演年齢は7歳前後～35歳前後と大きな幅があったことを明らかにした。会場からは、実際にどのような形でアルドが行われたか（暗唱部分、イジャーズの形態など）、シリア社会における各法学派の割合とアルドを実演した各法学派の割合の差異の理由、史料の性格がデータに及ぼす影響、に関する質問が出たほか、オスマン帝国の教育システムとアルドの衰退との関連性についても指摘がなされた。

### 野口舞子（お茶の水女子大学・院）「12 世紀マグリブ・アンダルスにおける法学者のネットワーク：カーディー・イヤードを中心に」

本報告はセウタ出身のマリック派法学者カーディー・イヤード（1149 年没）に焦点をあて、伝記集、ファトワー集を主史料に、カーディー・イヤードを中心とする法学者間のネットワークを学問、法行政の両面から考察した。その結果、マグリブとアンダルスの間には強い学問的連関が存在したこと、その一方でセウタ自体も学問習得の地として大きな役割を果たしていたこと、また法行政面においてもマグリブとアンダルスの間には強い結びつきがあったことを指摘した。会場からは、多方向への広がりを感じさせる「ネットワーク」よりむしろ、マグリブ・アンダルスの「地域性」に注目するべきではないか、という指摘が出たほか、アンダルスの学問的「周縁」としてのセウタの位置づけについても意見が出された。

### ハシャン・アンマール（京都大学・院）「イスラームにおけるハムル（酩酊飲料）の禁止：古典資料を用いた立法過程再構成の試み」

本報告はイスラーム食事規定における「ハムル（酩酊性飲料）」の禁止がどのような歴史過程を経て成立したのかを、クルアーンの章句を元に 4 つの時期に区分して検討し、その段階的発展を分析した。その上で、こうした問題は個別的にはではなくイスラーム社会全体の文脈の中に位置づけて考察されるべきであり、これは現代のイスラーム経済の一分野であるハラール食品の考察においても同様であるとした。会場からは、「ナディーム（飲み仲間）」の存在に見られる宮廷酒宴の慣例化といった歴史的事実とイスラーム法における禁止の共存状態をどのように解釈するべきかという問いが出された。（太田啓子）

「王の祝祭」から近代国家祝典へ：オスマン帝国における王権祝祭の契機と変容」と題された奥美穂子氏の報告は、オスマン帝国における「王の祝祭」と呼ばれる祝祭／祝典の定義が各時代の社会情勢や権力・宮廷事情に応じて変容してきたことを実証的に論じるものであった。とりわけ 19 世紀以降になると、当時世界の覇権を握っていた西欧諸国における王権祝祭との関連から、「王の祝祭」の枠組みや概念、また祝賀対象に変化が生じたこと、さらには年祭化が生じたことが指摘された。質疑応答の時間は、オスマン帝国を専門とする研究者のみならず、人類学の研究者からも質問がなされるなど、大いに盛り上がりを見せた。

「19 世紀」エジプトのマウリドに対する観察と記述：ダウサを分析の中心として」と題された近藤文哉氏の報告は、19 世紀のエジプトのマウリドでおこなわれていたダウサと呼ばれる儀式を取り上げて、これを既述したイギリス人の旅行者・滞在者の著作との関連から考察するものであった。報告では、「解釈学的分析」と「計量的分析」の双方を駆使しながら、西洋人がダウサに

対して否定的な価値のみならず時に肯定的価値を置いていたこと、統治の観点からダウサを禁止しようとした人々が現れたこと、ダウサ禁止後も数十年は注目され続けていたことなどが明らかにされた。新たな分析手法を積極的に取り入れて、当時のマウリドをめぐる状況を論じた刺激的な報告であった。

「苗農場で働く：現代エジプトの沙漠開拓地における農業実践の一事例として」と題された竹村和朗氏の報告は、現代エジプトの耕地面積合計の約3割を占める「新しい土地」「沙漠開拓地」のなかでも、「苗農場」を取り上げて、その実態や、そこから浮かび上がる社会・権力関係を明らかにしようとするものであった。2年近くにわたるフィールドワークから得られた様々な写真やエピソードが披露され、各種統計を読むだけでは見えてこない、今日のエジプトの農業や農村の実態が明らかにされた。国民間の経済格差を埋めることを目指した「新しい土地」においても、時の経過とともに格差の固定化・再生産化が生じている可能性が指摘されていたことなどは大変興味深かった。（千葉悠志）

## 第8部会

### 矢久保典良「日中戦争後期、中国ムスリム団体の憲政論議と「戦後構想」：1943年以降の言説を事例に」

この報告は、日中戦争下に中国ムスリムの統合を試みた団体、中国回教救国協会（1943年に中国回教協会に改称）による憲政に関する論議を分析し、この団体の戦後構想の一端を明らかにすることを試みた。焦点が当てられているのは、戦況や社会状況が変化し、協会が改組した1943年以降である。マイノリティであるムスリムによる憲政論議への参加を、彼らにとっての「生存戦略」という観点から論じる興味深い内容である。

### 役重善洋「日中戦争下における日本軍の宗教工作とシオニズム運動」

この報告は、日中戦争下の1930年代における日本のキリスト教各派、特にホーリネス教会と軍部との関係を中心に、中国における宗教工作の意味を検討した。それによって、キリスト教シオニズムなど宗教的イデオロギーの持った政治的意味が考察された。この報告は、第一報告と同じ日中戦争における宗教の問題を全く別の角度から論じており、合わせて考えると面白い。

### サット・ヌールッラー「トルコ学術界における井筒俊彦の位置づけ：評価と批判」

この報告は、世界的に有名な哲学者・イスラーム研究者である井筒俊彦の、トルコ学術界における評価及び批判について論じた。井筒に関しては、西洋的オリエンタリストでない点などが評価される一方、そのイスラーム理解に関しては批判もある。また、英文著作しかトルコ語に訳されておらず、日本語著作

が注目されていないといった状況も説明された。今後報告者自身の見解を明確にすることによって、さらなる研究の発展が望まれる。(山口元樹)

### 【第 32 回年次大会を終えて】

慶應義塾大学三田キャンパスにて開催された日本中東学会第 32 回年次大会は、おかげさまで盛会のうちに終了することができました。初日の公開シンポジウムには 200 名近い方々のご参加をいただいたほか、当日受付分を含めた参加申込者の数は 300 名の大台に達しました。家島彦一先生をはじめとする初日の公開シンポジウムにご登壇いただいた皆様、2 日目の個人研究発表および企画セッションの報告者の皆様、ご参加いただいた全ての方々に厚く御礼申し上げます。

半年以上にわたる準備期間と当日の大会運営を終えた今の感想は、個人的には「なんとか乗り切れた」という一語に尽きます。しかし、今思い返すと「来年、三田で日本中東学会を開催することになったので手伝いをよろしく」との長谷部史彦・大会実行委員長からの依頼を引き受けた 1 年前、私は全く甘い見通しを立てていました（大会事務局長を任されるとは予期していなかったということもあるのですが）。

ところが、大会事務局長の職を拝命することになり、また準備作業が徐々に本格化するにつれ、「これは大変なことになりそうだ」と認識をあらためざるを得ませんでした。開催準備に中心的な役割を担うことが期待された専任教員の中に、諸々の事情により開催準備に関われない方々が複数おられたためです。

また、学生スタッフの確保にも当初は懸念を抱えていました。大会当日に協力が見込める博士課程の院生は数が限られていたため、修士課程と学部生に協力を依頼し必要な員数を確保しました。しかし、学部生は言うに及ばず、修士課程の院生も多くは今春新たに院に進学したばかりの学生であったため、学会運営のような仕事に向いているかは未知数でした。

幸いにも、以上の懸念は全くの杞憂に終わりました。長谷部委員長の呼びかけに応じ多くの旧知の方々が実行委員を快く引き受けて下さったおかげで、開催準備・当日運営共に円滑に進めることができました。特に、大会前日までの準備作業においては、会計という最も緊張を強いられる仕事を引き受けてくれた杉山隆一さん（早稲田大学）、初日の公開シンポジウムのチラシのデザイン案を作って下さった貫井万里さん（日本国際問題研究所）、要旨集の編集作業を主導してくれた山口元樹さん（日本学術振興会）のお三方の労を多としたいと思います。本当に助かりました。

当日運営における院生・学生スタッフの皆さんの活躍も、目覚ましいものがありました。実際に彼らの働きぶりは、東長靖・日本中東学会長をはじめ多く

の来場者の方々に強い印象を残したようです。印象を残したと言え、長谷部委員長の得意分野(?)であり、彼が陣頭に立ち準備した懇親会の食事也大変ご好評をいただきました。おかげで公開シンポジウムが聴衆の知的好奇心を、懇親会が参加者の胃袋を満たし、初日は大会の成功に向け幸先の良いスタートを切ることができたと思っております。

このように、実行委員の皆様のご多大なご協力・ご支援、また当日運営の中核を担った学生スタッフの方々の奮闘を抜きに今次大会の成功はありませんでした。また専任教員の中では学内の事情に最も疎い私が事務局長という大役を果たすことができたのも、ひとえに実行委員・学生スタッフの方々のおかげです。

最後に、前回大会の事務局長を務められた森山央朗さんが学会事務局長であったことも、私にとり幸いでした。ご存知の通り、開催準備にあたり大会事務局長は学会事務局長と幾度となくやり取りをすることになりますが、その度に森山さんをご自身の経験に基づく貴重な助言を下さいました。この場を借りて御礼申し上げます。  
(勝沼聡 大会実行委員会事務局長)

## 【大会決算】

日本中東学会第32回年次大会決算

収入の部		支出の部		
大会開催費	(学会事務局より)	400,000	印刷代(プログラム・要旨集)	317,260
大会参加費	(事前支払 211名)	211,000	郵送費(プログラム他)	152,972
	(当日支払 89名)	178,000	懇親会費	840,000
懇親会費	(一般・事前支払 88名)	528,000	アルバイト代(学部生)	81,000
	(学生・事前支払 27名)	108,000	アルバイト代(大学院生)	115,000
	(一般・当日支払 19名)	133,000	接遇費(来賓・韓国中東学会)	5,470
	(学生・当日支払 8名)	40,000	初日パネリスト・スタッフお弁当代	37,650
お弁当代		65,000	2日目お弁当代	73,950
書店寄付(6店分)		30,000	錯誤入金返金	3,000
錯誤入金		3,000	消耗品費等(配布バックその他)	67,189
収入合計		1,696,000	振込手数料	432
			剰余金	2,077
			支出合計	1,693,923

託児所決算

収入(円)		支出(円)	
利用者負担(4名、500円/1時間)	16,500	託児所運営委託費	119,000
学会予算より補填	102,750	託児所代返金(1名)	250
入金合計	119,250	出金合計	119,250

(佐野東生)

## 『日本中東学会年報 (AJAMES)』編集委員会報告

### 1. 32-1号、32-2号編集中

現在、32-1号の編集作業が今年7月中の刊行を目指して大詰めに入っています。また、32-2号につきましては、6月1日に投稿を締め切りました。現在審査作業に入っているところです。

### 2. 次号締め切りのお知らせ

次号33-1号の締め切りは12月1日です。論文、研究ノート、書評等さまざまなジャンルでの投稿をお待ちしております。とくに欧文での投稿を歓迎しております。

### 3. 博士論文要旨

AJAMESでは、会員による中東関連の博士論文要旨(英文)を掲載しています。とくに締め切りを設けておりませんので、最近博士論文を提出された会員の方は、随時ご投稿ください。また、お近くに中東関連で博士論文を提出された方がいらっしゃれば、ぜひ投稿を呼びかけてください。

### 4. 本年度編集委員会の体制

本年度の編集委員会は以下のような体制になりました(敬称略)。前年度からの変更としては、縄田浩志氏と藤元優子氏が退任し、錦田愛子氏、斎藤剛氏、福田義昭氏が新たに就任しました。

編集委員長：粕谷元

副編集委員長：保坂修司、近藤信彰

編集委員：松永泰行、横田貴之、山尾大、阿部るり、堀井優、土屋一樹、  
青柳かおる、浜中新吾、錦田愛子、斎藤剛、福田義昭

海外編集委員：Dale F. EICKELMAN、R. Stephen HUMPHREYS、KIM Joong-Kwan、Abdul Karim RAFAQ、SONG Kyung-Keun

本誌に関するお問い合わせ先、原稿投稿先は以下のとおりです。

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40

日本大学文理学部史学科 粕谷元気付

『日本中東学会年報』編集委員会

ajames-editor@james1985.org

5. 平成 28 年度科研費（研究成果公開促進費・国際情報発信強化（B））の採択  
 昨年度、「年報のオープンアクセス化による日本からの中東研究発信強化」  
 の名称で応募した平成 28 年度科研費（研究成果公開促進費・国際情報発信  
 強化（B））が採択されました。期間は 1 年で、金額は 250 万円です。

#### 6. 抜刷について

現在、AJAMES では執筆者に抜刷 50 部を贈呈していますが、近年、紙の抜  
 刷の無償提供を止めて、その代わり PDF の抜刷を無償提供する学協会が増加  
 しています。AJAMES でも、近年、PDF 形態の抜刷の提供を求める執筆者が  
 徐々に増えてきました。

こうした状況に鑑み、先の総会でもご報告いたしましたが、33-1 号から、紙  
 の抜刷については希望者のみに実費で有償提供し、PDF の抜刷を無償提供す  
 ることを現在理事会で検討中です。

この件につきまして、ご意見等ございましたら、事務局または編集委員会ま  
 でお寄せください。

#### 7. CiNii の閲覧状況

国立情報学研究所論文情報ナビゲーター（CiNii）を通じた 2015 年 1 月から  
 2016 年 5 月までの本誌の閲覧件数は以下のとおりです。

##### 2015 年

1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月
705	257	184	383	513	617	742	324
9 月	10 月	11 月	12 月	合計			
264	770	549	696	6004			

##### 2016 年

1 月	2 月	3 月	4 月	5 月
1017	536	121	424	553

ちなみに 2013 年は合計 4824 件、2014 年は合計 5470 件でした。

（粕谷元 AJAMES 編集委員長）

## 第 11 回 AFMA モンゴル大会のご案内

1995 年に設立されたアジア中東学会連合 (Asian Federation of Middle East Studies Associations: AFMA) は、第 11 回 AFMA 大会をモンゴル・ウランバートルで 2016 年 9 月 23-24 日の日程で開催することとなりました。2 年に 1 回開催される本大会がモンゴルで開かれるのは、2008 年に次いで 2 回目となります。

今回の全体テーマは“World New Trends in the 21<sup>st</sup> Century and Middle East”で、MAMES (モンゴル中東学会) のニャムザグド会長から受けた連絡によると、歴史・政治・経済・文化・環境・市民社会など多岐にわたるテーマを歓迎することです。

日本中東学会では、若干名に対する参加費用援助を行うこととし、すでにメーリングリストでお知らせいたしました (応募はすでに締め切っております)。

前回 2008 年のモンゴル AFMA 大会には、JAMES から 7 名が参加しております。今回の大会にも、ふるってご参加下さいますようお願い申し上げます。

(東長靖 会長)

## 公開講演会のご案内

日本中東学会第 22 回公開講演会を下記の通り開催いたします。

「イスラーム世界の新しいライフスタイル：観光」

日時 2016 年 11 月 20 日 (日曜日) 13:00~16:50

会場 多治見市文化会館大会議室 (岐阜県多治見市十九田町 2 丁目 8)

最寄り駅: JR 多治見駅 (駅より徒歩 14 分)

アクセス <http://www.tajimi-bunka.or.jp/bunka/access.html>

今回の日本中東学会公開講演会は、岐阜県多治見市という、これまでイスラームとはほとんど無縁の中規模の地方都市で公開講演会を開催し、観光という新しい切り口を提示する、という二つの面で挑戦的な試みとして企画されています。

多治見市は、日本の経済・産業を牽引する中部地方の名古屋文化圏に位置しますが、首都圏や関西圏に比べて、中東・イスラーム世界についての知識が、研究機関・教育機関などを通じて行き渡りにくいところだと考えられます。しかし、中部国際航空セントレアが 2015 年に開港 10 周年を迎え、中部・北陸地方の広域観光周遊ルートを龍のかたちに見立てた、「昇龍道」プロジェクトが始まり、多



治見市もそのプロジェクトの一翼をになうこととされています。

多治見市に限らずこの数年、日本各地で観光客誘致が町おこしになると期待されており、2020年の東京オリンピック・パラリンピックをその契機としたい、ともいわれています。さらには、外国からのムスリム観光客の増加を見込み、観光庁を中心に、ハラール食について新たな取り組みが行われています。

ひるがえって中東・イスラーム世界の諸国をみれば、この半世紀ほどで急速に進行した都市化・インフラの整備、メディアの発達と消費文化の浸透、航空機利用者の飛躍的増加は、ムスリムたちのモビリティを高め、その形態や帰結について、歴史を踏まえつつも、新たな光を当てて理解する必要が生じています。イスラーム世界の拡大、交易ネットワーク、巡礼の歴史的研究として蓄積してきた知に、さらに転回を加えることが、学問的にも社会的にも意義あるものと考えられるのです。

なお、来日ムスリムのなかで最も数の多いのはインドネシア人です。日本との関係の深い国ですが、その近年の社会的=政治的变化について、日本では十分に知られていません。今回の公開講演会では、そうした一面を知ってもらう講演も用意しています。

秋の多治見に是非おでかけください。

プログラム

13:00-13:15 開会挨拶

13:20-14:05 安田慎（会員・帝京大学講師）「観られる人びとから観る旅行者へ：イスラーム世界の観光市場とムスリムたち」

14:10-14:55 堀抜功二（会員・日本エネルギー経済研究所研究員）「ドバイは一日にして成らず：中東産油国における航空競争と観光戦略の展開」

15:00-15:45 小林寧子（ゲスト講師・南山大学教授）「インドネシア：ムスリム民主主義大国への道」

15:45-16:00 休憩

16:00-16:30 質疑応答

16:35-16:50 閉会挨拶

上記のプログラムは最終的なものではないので、詳細については変更もあり得ることをご了承ください。確定次第、学会ウェブサイトでお知らせします。[http://www.james1985.org/public\\_lectures/public\\_lectures\\_index.html](http://www.james1985.org/public_lectures/public_lectures_index.html)

一般公開・無料

この公開講演会は日本学術振興会科学研究費助成事業（研究成果公開促進費）の助成を受けて行われます。

問い合わせ先： 日本中東学会事務局

京都市上京区今出川通烏丸東入 同志社大学神学部森山央郎研究室内

メールアドレス james@james1985.org

(山岸智子)

## 日本における中東・イスラーム研究文献データベースの アップデート（更新）について

「日本における中東・イスラーム研究文献データベース」は、明治以降現在までの文献情報をオンラインで検索できるデータベースとして、広く研究者・学生・大学院生・教員・ジャーナリスト・一般の方に、利用いただいています。収録対象は、イスラーム時代以降の中東地域に関わる研究文献（主体は日本語文献、但し日本で刊行された外国語文献、日本人研究者による外国語文献を含む）とし、一部周辺の地域や時代に関わる文献も含まれています。

その母体は、東洋文庫附置ユネスコ東アジア文化研究センターが 1992 年に編集・刊行した冊子体目録、およびそれを拡張した目録データベースであり、その後、日本中東学会との連携により、科学研究費補助金、文部科学省「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業」（2008-12 年度）や NIHU プログラム「イスラーム地域研究」（2006-2015 年度）により、アップデート（遡及&新規文献調査・入力）を継続してきました。2016 年 7 月現在、当学会サイト(収録対象：1989 年以降)において約 38,200 件、東洋文庫ウェブサイト(収録対象：1868 年以降)において約 53,000 件を掲載しています。また、国際版（英語版、約 6,300 件収録）も並行して公開しております。

日本版：[http://search.tbias.jp/document\\_research.cgi](http://search.tbias.jp/document_research.cgi)

国際版：[http://search.tbias.jp/BDIMEJ/document\\_research.cgi](http://search.tbias.jp/BDIMEJ/document_research.cgi)

NIHU イスラーム地域研究事業は 2016 年 3 月をもって終了し、今後は、(公財) 東洋文庫研究部と日本中東学会の連携によって、当該文献目録データベースの維持・更新を続けていく予定です。これを機に上記ウェブサイトページを改良し、表示・検索等の機能を強化します。これまで年間約 2,000 件の文献のアップデートをおこなってきましたが、資金上も作業上もこれだけの量のアップデートをつづけることは難しくなっております。そこで、会員の皆様に、以下の形で、新規研究文献情報の登録のご協力をお願い申し上げます。

日本中東学会ウェブサイトの新規業績サイト (<http://www.james1985.org/database/touroku.html>)で直接入力・登録するか、あるいはメールあるいは添付ファイルで業績をお送りください。とくに、CiNii に登録されない単行書所収論文や外国・外国語で発表された文献の情報をお知ら

せくださると助かります。新規文献については、学会サイトで毎週定期的に更新し、その後、日本中東学会サイトと東洋文庫サイトに収録します。

新規データページ [http://www.james1985.org/database/new\\_entry.html](http://www.james1985.org/database/new_entry.html)

文献情報連絡用メールアドレス 日本中東学会 DB 編集係

[james@james1985.org](mailto:james@james1985.org)

(東洋文庫 三浦徹・後藤敦子)

### 寄付金の受贈について

昨年度末に、元会長お三方から学会に寄付金を頂戴いたしましたので、ここにご報告申し上げます。2015年7月発行のニューズレター140号ですすでにお伝えしましたとおり、第9回シャイフ・ザーイド書籍賞(Sheikh Zayed Book Award)で、塙治夫先生(本学会元会員)・杉田英明先生(本学会会員)が受賞されたことはご存知かと思いますが、この賞の選考に携わられた元会長の方々より、合計55万円のご寄付が寄せられたものです。

頂戴いたしましたお金は、大会開催時の託児所設営やAFMA派遣費用援助などに、有効かつ大切に使用して頂きたいと存じます。

学会を代表して、心よりお礼申し上げます。

また、塙先生はこの4月にご逝去されました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。  
(東長靖 会長)

### 寄贈図書

#### 【単行本】

小林寧子編著『アジアのムスリムと近代(3): 植民地末期の出版物から見た思想状況』NIHU Program Islamic Area Studies SIAS Working Paper Series 26、上智大学アジア文化研究所・イスラーム研究センター、2016年。

SUGAHARA Yumi ed., *Comparative Study of Southeast Asian Kitabs (4): Local and Global Dynamism in Transformation of Islamic Tales*, NIHU Program Islamic Area Studies SIAS Working Paper Series 27, Tokyo: Institute of Asian Cultures – Center for Islamic Studies, Sophia University, 2016.

#### 【逐次刊行物・ジャーナル等】

『岡山市立オリエント美術館研究紀要』第29巻(2015年)。

『第 16 回アジア太平洋フォーラム・淡路会議』アジア太平洋フォーラム・淡路会議事務局、2016 年.

『季刊アラブ』No.157 (特集 人道危機の現場) (2016 年夏).

(森山央朗 事務局長)

## 会員の異動 (2016 年 4 月以降)

### 【新入会員】

高木 宗一郎

野村 明史

黒田 賢治

大津谷 馨

佐藤 愛

リーム アハマド

出川 英里

庄司 翼

永島 育

【所属先・連絡先の訂正・変更】

横田 勇人

多田 守

森田 豊子

モハメド オマル アブディン

守川 知子

ハツガク ラナ

【退会会員】

菟原 卓

山岸 美智子

今井 静

川瀬 豊子

長村 嘉浩

小平 良一

川口 琢司

所 木綿子

宮澤 栄司

山田 幸正

愛宕 あもり

稲田 浩

高木 未希

大庭 竜太

【強制退会会員】

後藤 晃

佐藤 規子

John Edward Philips

石原 忠佳

新井 早苗

及川 秀和

長谷部 圭彦

藤森 浩樹

野口 雅昭

柳瀬 悠有

(森山央朗 事務局長)

事務局より

年次総会・大会も盛会のうちに無事に終わりました。大会実行委員会の皆様には、円滑な大会運営にご尽力くださりましたこと、改めて御礼申し上げます。また、ご講演、ご発表、ご参加の会員の皆様におかれましても、色々と有り難うございました。何となく一段落といったところで、学会事務局も若干まったりした雰囲気になっております。加えて、京都の梅雨のひどい湿気にもやられ

ております。しかし、現実はだるくなってもいられません。総会議事録にもありますとおり、昨年度に会費の取り立てができなかったため、今年度は、昨年度の分も取り立てに励まなければなりません。皆様のお手元にも会費納入のお願いと、皆様の未納分が記載された郵便振替用紙が届いていることと思います。諸事物入り、かつ、ご多忙のことと思いますが、速やかな会費の納入をお願い申し上げます。  
(森山央朗 事務局長)

## 編集後記

慶応義塾大学での今年度の研究大会も、盛況のうちに幕を閉じました。ご参加された会員の方々も、さまざまな場面を楽しまれたことと思います。実行委員会の方々に、厚く御礼を申し上げます。また、シンポジウムや研究発表の報告者の方々、お疲れ様でした。僕も楽しませていただきました。ありがとうございました。

来年度の研究大会は、九州大学で開催されます。みなさま、ぜひ博多の地での大会にご参加ください。清水和裕・大会実行委員長をはじめとする大会関係者の方々、どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

そのまえには、本号でのご案内記事にもあります、モンゴルでの AFMA 大会や本学会の公開講演会なども開催されます。今後のご案内は、学会メーリングリストでも行ないますので、ご確認をお願いいたします。  
(松本弘)

## 会費納入のお願い

本会は会費前納制をとっております。2017年度までの会費に未納がある方は、以下の振込先に納入をお願い致します。納入済の年度がお分かりにならない場合は、事務局まで気軽にお尋ねください。AJAMESに未送付分がある場合は、2016年度以前の未納分会費の払込確認後お送りいたします。会費納入率は低い状態が続いており、学会事務局の運営にも支障を来しかねない状況です。

ご協力の程を、お願い申し上げます。

### 会費振込先

三井住友銀行 渋谷支店

普通預金口座：5346808

名義：日本中東学会 代表 東長靖

もしくは

郵便振替口座

(払込取扱票使用の際の口座記号・口座番号)

00140-0-161096

(他金融機関からの振込用口座番号)

ゆうちょ銀行〇一九(ぜろいちきゅう)支店

当座 0161096

日本中東学会

日本中東学会ニューズレター 第144号

発行日 2016年7月28日

発行所 日本中東学会事務局

印刷所 同志社大学良心館プリントステーション

日本中東学会事務局

〒602-8580 京都府京都市上京区今出川通烏丸東入  
同志社大学神学部森山央朗研究室内

電話&ファックス：075-251-3358

Eメール：james@james1985.org

<http://www.jamaes1985.org>